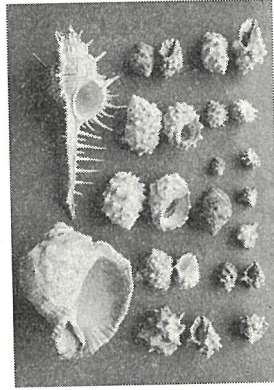


貝紫をたずねて

— 沖ノ島紀行 —



はからずもラーネッド奨学金をちようだいし、わが同志社カラーであるローヤルパーブルの研究をするため今まで志摩の海へは数回足を運び、イボニシ、クリフレイシなどの貝を採取して来た。しかし貝紫を持っている「あつき貝」の種類は多く、できうる限りの種類を集めたいと思ひ春の休暇に入った一九七一年三月二十三日、新大阪一八時五分発の鷺羽三号の人となった。高松からは夜行列

光 一 瀬

車、始発から満席。一睡もせぬうちに予定通り二十四日七時五十八分終点中村に着いた。バスで宿毛まで、あらかじめ時刻表で宿毛から相島までの一日数便のバスの時間に合わせ夜行で来たのに、二時間余り待たないとバスは出ない。朝昼兼用の食事をすましようやくバスに乗る。碧い海を近くに、景色にみとれているうちに山の細い道に入るとはや山桜が咲いている。さすが南国だなあと感心して近くを見れば菜の花が道端に色どりをそえている。約一時間で終点相島に着く。陽はうららかな春日和だが風は強い。めざす沖ノ島への便は三時までまだ二時間余り待たねばならない。浜に出て貝を探すが一つも見当たらず時間をもて余す。一日二便の小舟に乗り込み太平洋に乗り出すと波が高く木の葉のように揺れ、乗客の大半は

小間物屋を払げ出したが舟の好きな身には気持ちが良い。一時間で待望の沖ノ島母島港に着いた。岸まで山が迫り谷川の流れを中心に家がぎっしりと建っている。石段の道を昇ると釣宿と書いた古い旅館があったので一泊を頼む。さっそく主人に貝を見せてこのような貝の採れる所を尋ねると、貝のことならこの上の寺の和尚さんに聞けとのこと、すぐ何百かの石段を昇って寺を訪ねるとあいにく法事で留守、来意を家人に告げて夜再度訪問をことづける。酒一升を手土産に夕食後本堂に和尚さんを訪ねると、祖父の代から三代にわたって集められた貝の標本が整理されてギッシリつまった箱を並べて待っていて下さった。貝図鑑で見た珍らしい貝や長者貝の別名のあるオキナエビスも大きいのが二つもある。このオキナエビスは一八七七年ロンドンの大英博物館から東京大学へ一個百ポンドという値で注文が来て、命を受けた東大付属臨海実験所の御備漁夫青木熊吉がみごとこの貝を釣り上げ、途中一泊二銭の宿賃を払い東大に届け大枚四十円のお礼をもらって長者になったみたいだと語ったところからこの名が付いたという。戦後台湾でとれたこの貝を鳥羽の水

族館が百万円で購入したとか。目的の「あつき貝」は標本になかったのでこの島で採れる所を尋ねると、以前はどこでもたくさんいたが島の人が食べたので少なくなつた、今ではこの先の無人島「ゆるぎ岩」に行けばいるだろうとのこと。貝の話に夢中で時間をすぎし寺を辞した。

明けて二十五日、同宿の釣人たちと一緒に宿の舟に弁当、水筒を持って乗り込む。太平洋の黒潮流れる所ゆるぎ岩に渡り岩場に降りる。海は碧く澄み一面に珊瑚が繁茂している。シャツだけになり藁草履に履き替えて岩場を探すとシロクチレイシがいた。一時間ばかり岩場をはい回って、クリフレイシ、レイシ、シロクチイガレイシ、キナクチレイシなど採取し、用意の金鎖で貝を割る。暖かい海の貝ほど殻が厚くクリフレイシ以外は小金鎖では割れそうにない。乳白色をしたパールラインをピンセットでつまみ取り布に塗ると黄緑から太陽の光を受けて徐々に紫色に発色する。一個の貝で数ミリ四方を染めるのがやっと、一反の布を染めるのは何万の貝が要る。ローヤルパーブルの意味が良く分かる。百個も貝を割れば単調な作業に飽きる。また

貝を採りに出かける。手の指は赤紫に染まり臭気が強い。手を海水で洗って岩に腰かけ対岸の母島、眼の前の珊瑚を眺めながらおにぎりを食べる。空も海も奇麗に澄み空気もうま。一ぶくしていると小舟に乗って老人が登ってきた。この島の海鳥の卵を採るのだと絶壁のような斜面を昇って行ったが一時間もたわず帰ってきて、今日は一つもなかったといながら貝を割るのを見て何をするのか尋ねるのでローヤルパーブルの話をする、その貝なら眼の前の孤立した岩にいるはずだと舟に乗せてもらう。かきの殻で覆われている岩で「それそこに」と指差されて初めて分かるほど見付けにくいシロクチレイシを老人のおかげで採集できた。沖ノ島の断崖になっていゝる所ならもっとたくさんいる、暇があれば舟で案内してあげるのだが、と親切に言われても、夕方には宿の舟が迎えに来られることになっているので残念ながら今日は無理。しかし、はるばるの四国の端まで来た甲斐があつて、「あつき貝」科の七、八種は標本ができた。夕方釣人に乗せた宿の舟が迎えに来てくれた。今日は天気が良いすぎて一匹も釣れなかつた由、わざわざ四国まで来て一匹も釣れな

いのに一日中糸を垂れている根氣に敬意を表しながらも、貝採りに絶好の日であつたことを感謝した。袋に一杯採つた貝を戦果に宿に着いて、酢をもらつてイガレイシの標本作りを試みる。酢に貝の口をつけると生身が出てくると言われたからだ、いくらやっても固く閉じた殻は口を開かず、貝殻の方が酢に溶かされるので失敗。数日間は生きていますので京都に帰つてから煮沸して貝を殺し、身を取り出す方法を探ることにする。翌日、もう一日滞在して、舟を貸りて貝を採りたいと思つたが、一応の成果はあり、染標本も、モメン、絹、羊毛、アクリル、ナイロン、テロンと繊維別のもできた。しかも今日は空模様があやしい。心は島に残つたが午前の便で沖ノ島を後にした。舟の中で、昨夜寺に泊り一緒に和尚さんから貝の標本を見せてもらった東京の学生さんに会う。ダイビングにここまで来たとか。もし「あつき貝」を見付けたら送るから名刺をくれといわれ渡したが、その後二年、彼からは貝は一つも届かない。沖ノ島はその後テレビで宣伝され、心ない釣人のため海が荒らされた由、これもマスコミ公害か。(女子大学教授・被服材料学・染色学)